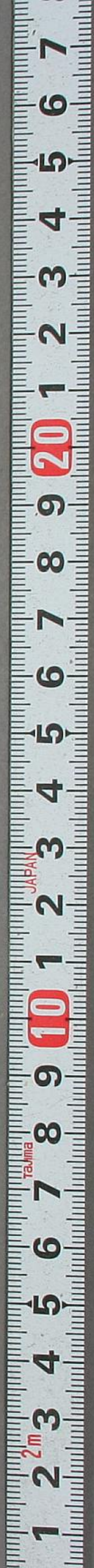


蠶さん 養やう 教けう 諭ゆ 集しゆ
全

原田織維文庫

文庫4

663



文庫 4
653



昭和三十年十月二十九日
第一商学部より移管

原田織文庫



蠶養教法集目錄

桑樹と作り益ある事

蠶種子見様の事

蠶種毒忌の除根と夏

種子に寒水に漬らす事

養蠶法道具の事

蠶生息と出る時の事



最細甚を以て蚕掃灰仕法のもの

蠶ふ大小出来ざる海のもの

強弱ふれ居起り入道のもの

繭代他らに仕極く事

繰取極く事

美湯仕立極く事



蠶養教諭集

人皇三十二代用明天皇此清宮に聖徳太子弟

機の改改輔け氏儀と書天蚕乃御を教へ給ひし事

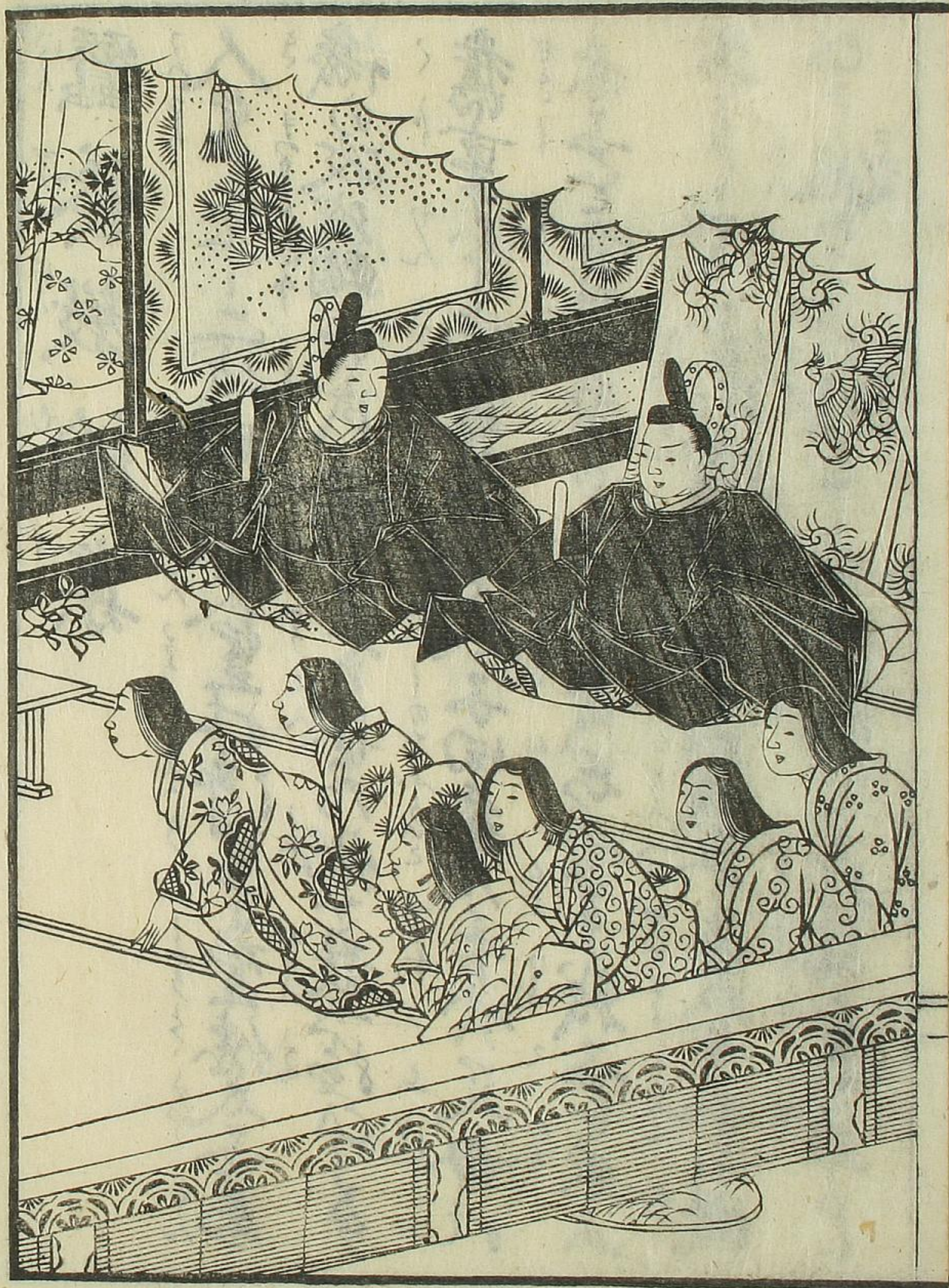
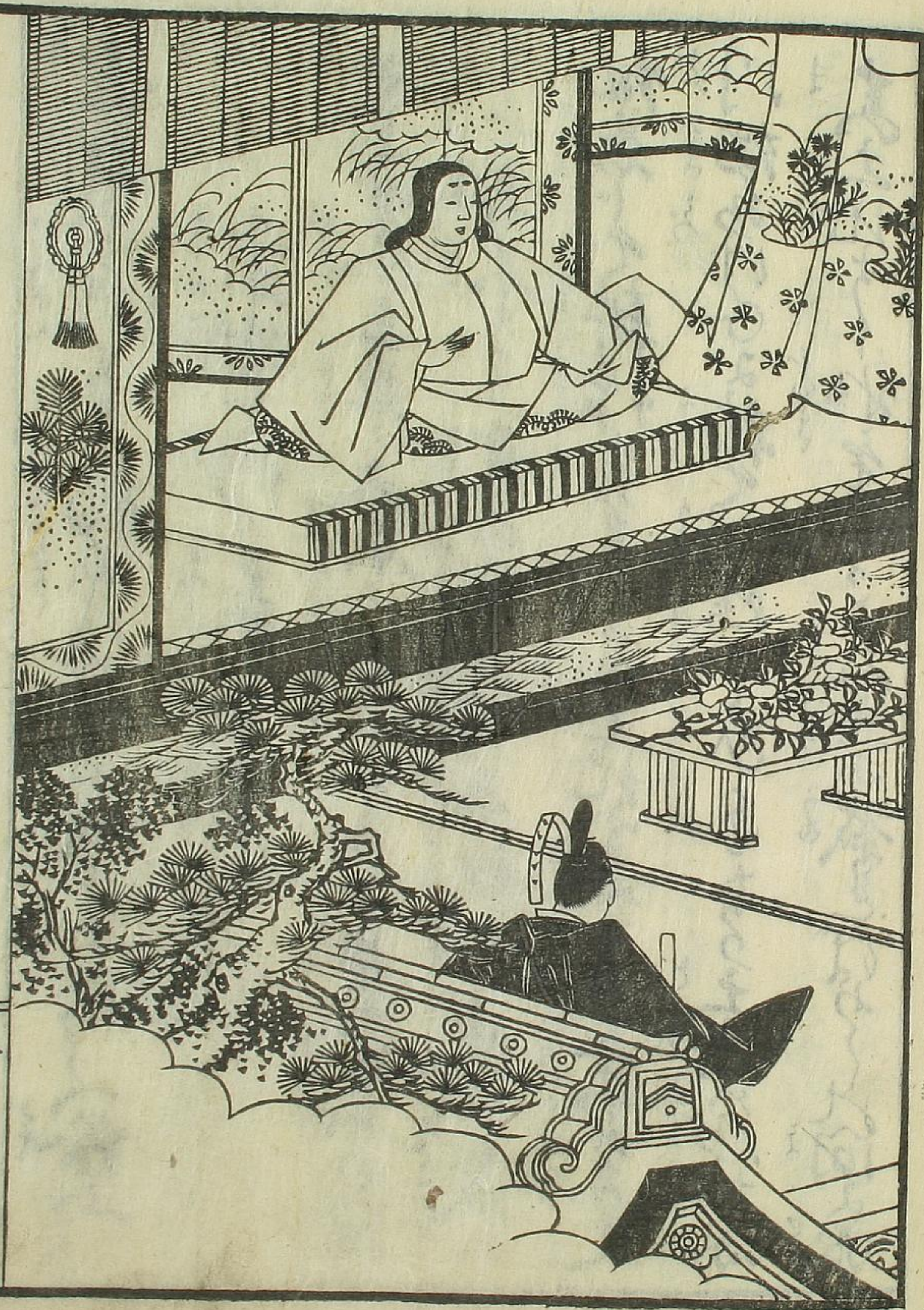
舊事本紀の皇太子回蚕成書云父母此

蚕を育つるごとく蚕成思ふ事我子と思ふ

おとせし寒暖陽氣の加減平生我身分小傲

ひと温かうば冷かうば平和たる様陽をせしむ

アタカ
ヒヤカ



重復回以多く粘力成つくととて一とれ(給ふ)

素樹と作り益ある事

昔小軍本三草一桑八葉とてあり桑は日本の一に
して名木あり桑の作り種は屋敷や家の土或は
畑藪にて耕作もあらが土肥ふ載てまき本あり又
川端あげこみ種は川除やひらなる土地の砂地亦
まき土より水まらるともふ載せばよくは回成

長年一養蠶の秘事も賞くまらぬ桑地荒野
成園や或は川縁の果あらしむ山岳谷畔地ととも蚕
と書ひて莫古の利便と得らるる多し尚書大傳云
天子諸侯よりさしむる公桑蠶室ありと云く史記の
竹園もその多く女は業にして男の多と書きたる耕
地の餘力も務て然る大令は海の中は族は農民の
物成園家と潤と身一なる七唐土中より五畝宛

樹々以桑とて人の徒らなるをいふ事なり
國の荒地多く其用の草木生茂り徒に空地と
なる歎く事あり是よりよくはやく
養蠶の道とて之を國中てもつて之を
領方功者此人の年々利徳を得その餘りて
田畑多く持つる人の荒地と再々なほして其を
百倍もやし一家とて粒のにおとす波や一村

一郷かくの如くありせば玉の豊からず春和
のおとくは穢と理並安氏此を督と謂つる
蠶種子見招の事
種子の随分揃く一面一粒よく生気強く卵は
中がくはば種を比合能くある蠶のとも死
種子のちりし能く思ふ身ひたうと扱ふ種病を
紙ふうと取付くと最ととあらざし種はなを蠶を

種子
見分
図



撰分 惣と蝶のむくと名付て撰出し蝶と上中下

と仕分ふかり能蝶のふひも並あり惣と蝶のた

ねの中並と去るし元種の色は其土地の精氣程

に配りたる赤土地は桑に去る並かふひかりわり

色とあつたり又黒土地の桑を飼ふ所の種より馬

とを帯ふま土地の桑喰い養れしひの種投色ふ

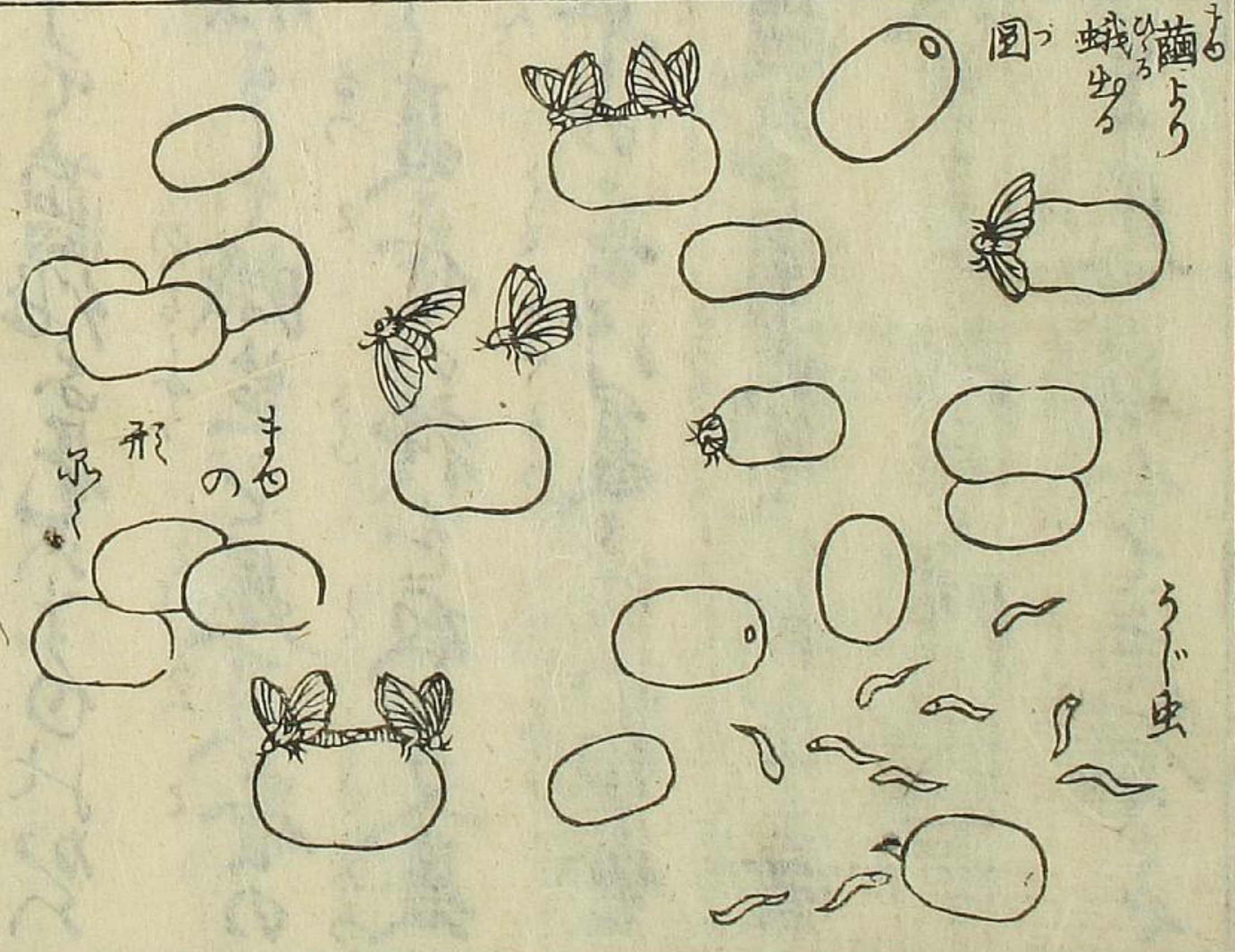
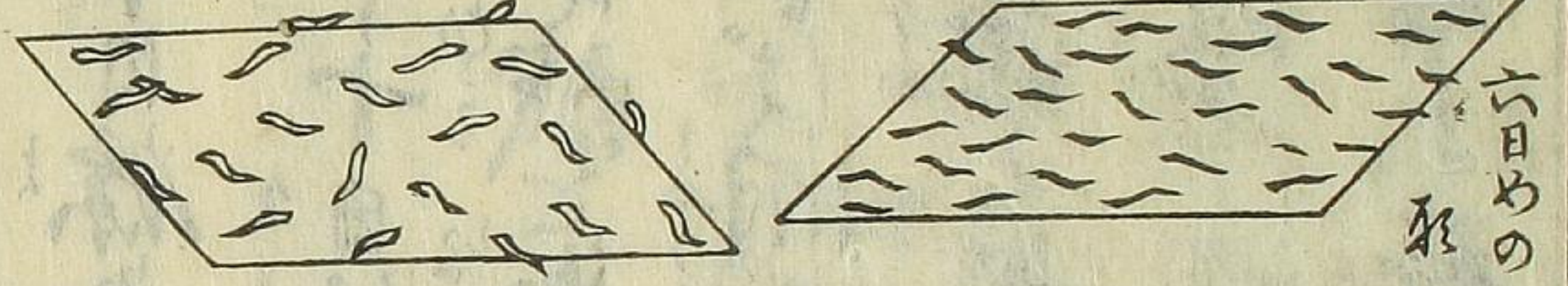
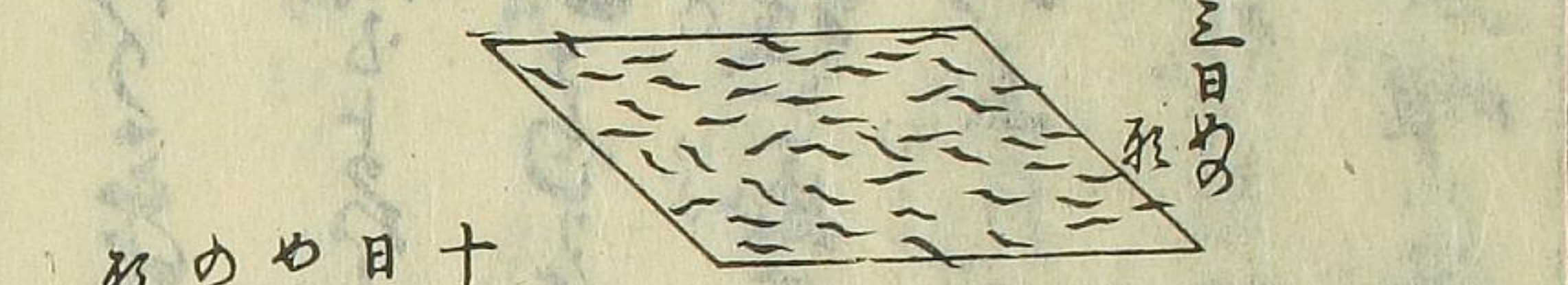
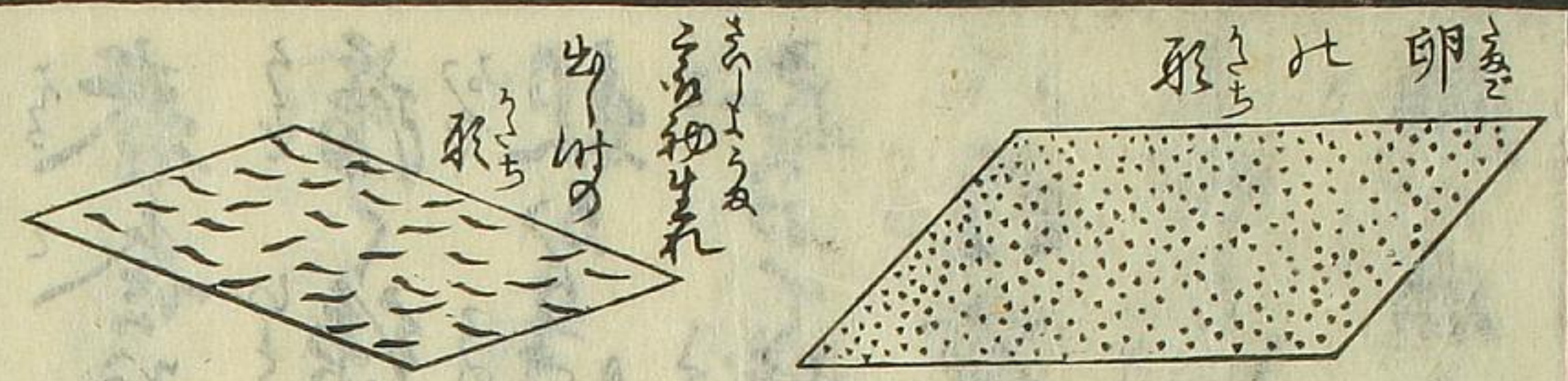
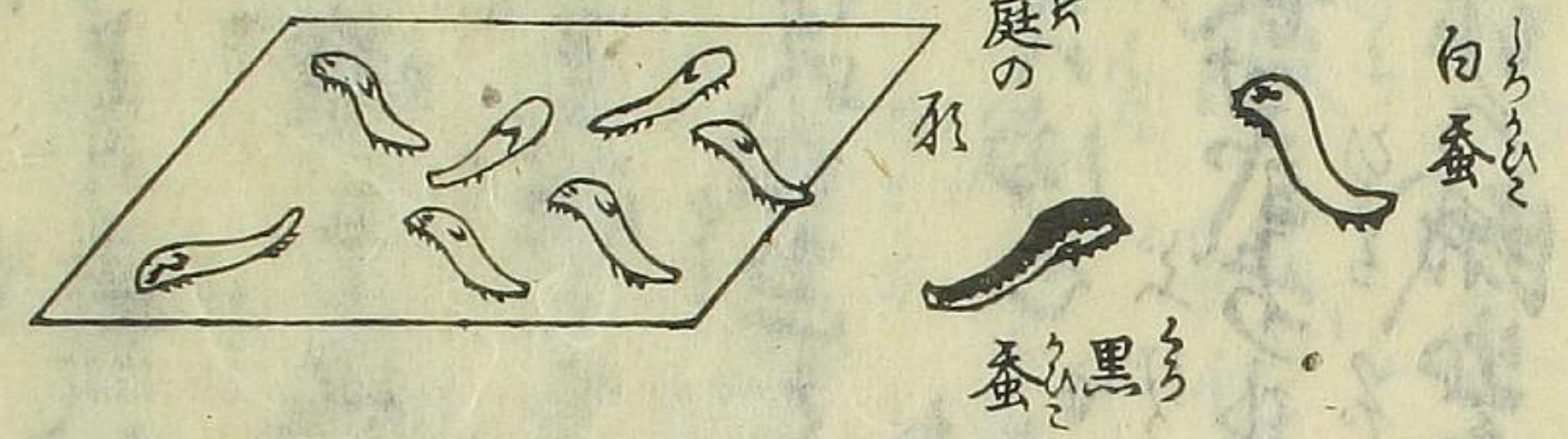
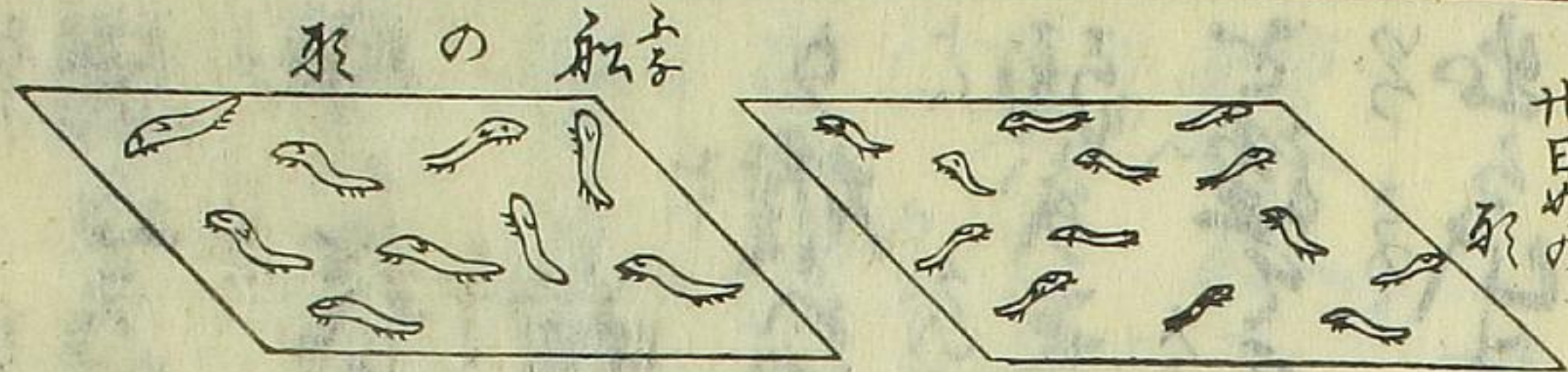
して種ふかりおぬじとくふの種まは種の色

あかかきりす 何國いづくにあくる地ち面めん宜よろまき川がは為此
場所ばしよへ上のぼ素す紙し作つくり或あるは刈かり素す又またのめれた素すをどほ
領りやう分ぶん此こゝ本ほん法ぽうとありて書かきひく蚕まゆの上のうへにこ繭まゆをて出いす
蝶てつと撰せんとありし種しゆと宗そうととんを次つぎの種しゆと場ば服ふく
ぶの切きり又またのさう種しゆ或あるはあり種しゆをさう色いろを此こゝは
名なのり又また蛾がの性しやうをたてどくとありの麦むぎ飯いの色いろふ
似にたりとありて名なはあつとや性しやうよき蛾がの白しろ飯い

のやとあり法ぽうふをよきまをて取とらんと思おもひ
第一だいいち種子しゆじ此こゝ善ぜんりくと冷ひや味あじをまきひりたりとも一いつ
の仲ななに蚕まゆうらうらも一いつ所ところは籠かごりしたるものなり是こゝ
代しろ糸いとよとる所のゆ多く出来でき糸いと甚お急いそぎとありて
是こゝを除のぞきてまきひりたりひた繭まゆをて取とり種しゆ子こ
をさうより出いすると較くらべ種しゆ子こを求もとめんと望もち望もち身み
蚕まゆ不ふ採さいりくと此こゝをさうとありたり大おほまを多く出来でき

ららるる是とぞ種も又いふ病種もいふ也これ
具名あり随分種元と吟味して種を求むし
まゝ蚕の種數教あるもいふも今本物おもはるる類
所北白繭蚕の夏及眠り夏及起る日數凡年七
八より半日餘ありてすもとははるる蚕の項小國
のいの字らり又黒班色は蚕あり又黄なるもと
ゆる蚕ありこれとまんことり又行夏といふ也

春蚕らり二年日餘ありて繭地は是のすも此の
薄く線もよる十日餘ありて蟻生と足夏蚕の
親ありけりもと蟻と出る夏蚕の種を取り又夏
蚕あり種と出せば明年の春に夏といふ白蚕
は種らる凡繭は長短凡角尖等け形は蚕
すもと成て日數十七八日ありて朝ありて時出る
雄の飛ふ雌の俵く静なり是を撰きて更合させ



朝あさの付つよりより蚕さハつ付つまでまで合あせせ蚕さくくししをを

 雄おのの後ごでで雌めをを床とをを紙しののせせ卵らんとと産うせせ種しゆと

 ななをを織おをを羽うをを凡お卵らんとと或あるはは又また粘ね粒りゅう産うとと

 りり雄おハハ又また日ひをを死しとと雌めハハ二に三さん日にち長ながてて死しとと

 弱よわ蚕さハハ肉にくもも汁じゆなるなる蛹ま蛾ごハハ行いかかてて七しち八はち日にち

 とと種しゆでで長ながササ或ある歩ぶ斗とハハ黄わうととなるなる虫むしとと化くわすすもも

 出いるるははいいのの蛾ごをを線せん又また収しゆががくくまま綿わたととなるなるもも

蠶種毒忌の好極しす

種しゆ水みづでで後ごのの紙し袋ふくろハハ全ぜん氣きはは籠かごららぬぬ中ちゆうふふくく

 夏あつよりより翌よく年ねんのの毒どくままをを冷ひやくく新あらたのの種しゆに

 虫むし油あぶらをを塩しほ氣き多おほ量りやう粉こなのの乾かわ法ほうははるる茶ちや麻あさのの子こ

 樟かう腦のう大おほ毒どくをを又また種しゆふふけけ並なら魚いさなくくんん或あるハハ蚊か

 惟ただ子こにに包かひひとと大おほふふ忽たちちちのの燈とうののよよままほほりりしし種しゆハ

 蚕さ出いだだととししのの毒どくをを中ちゆうのの毒どくとと物ものハハ入いららぬぬ

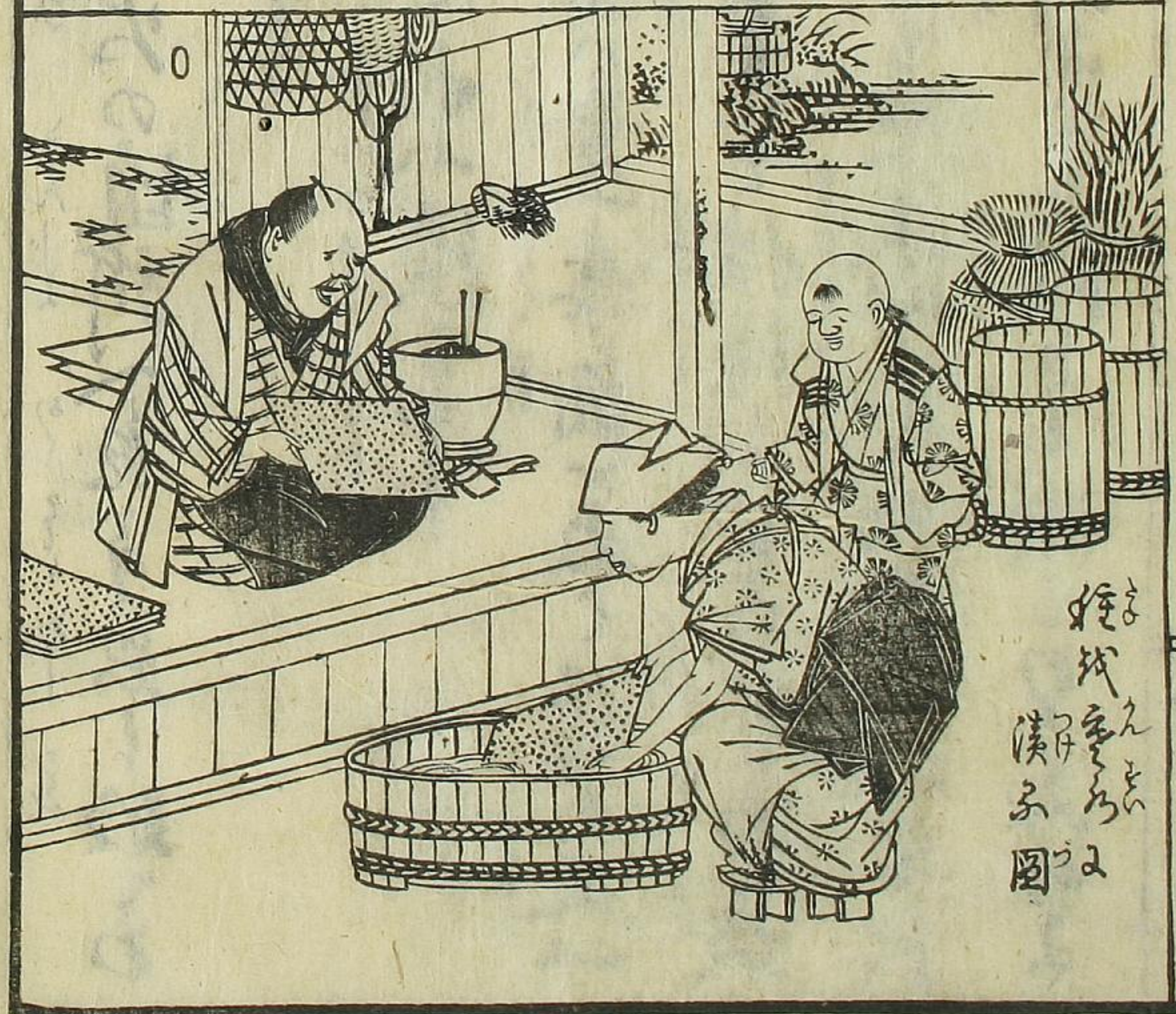


日の所々新焼火の道新へ並り忍び如てわ
 しま白ひと長ひらう。

種子以寒水漬る事

種と寒水漬るの事一毒氣とぬくたぬ之又一
 説ふ性弱と卵の生息と性強ととの事出る故
 蚕生氣はうとらふ又的年六月小風の死
 痛がしとらり新ふる漬る固むわりみづよ

漬みとまのたごい
 に漬るせ入漬を
 日教の凡七八日ほど
 漬ふたうのそまつ
 よに朝の程水にと
 合りのさう其の
 魚丸の付ふ日わさ

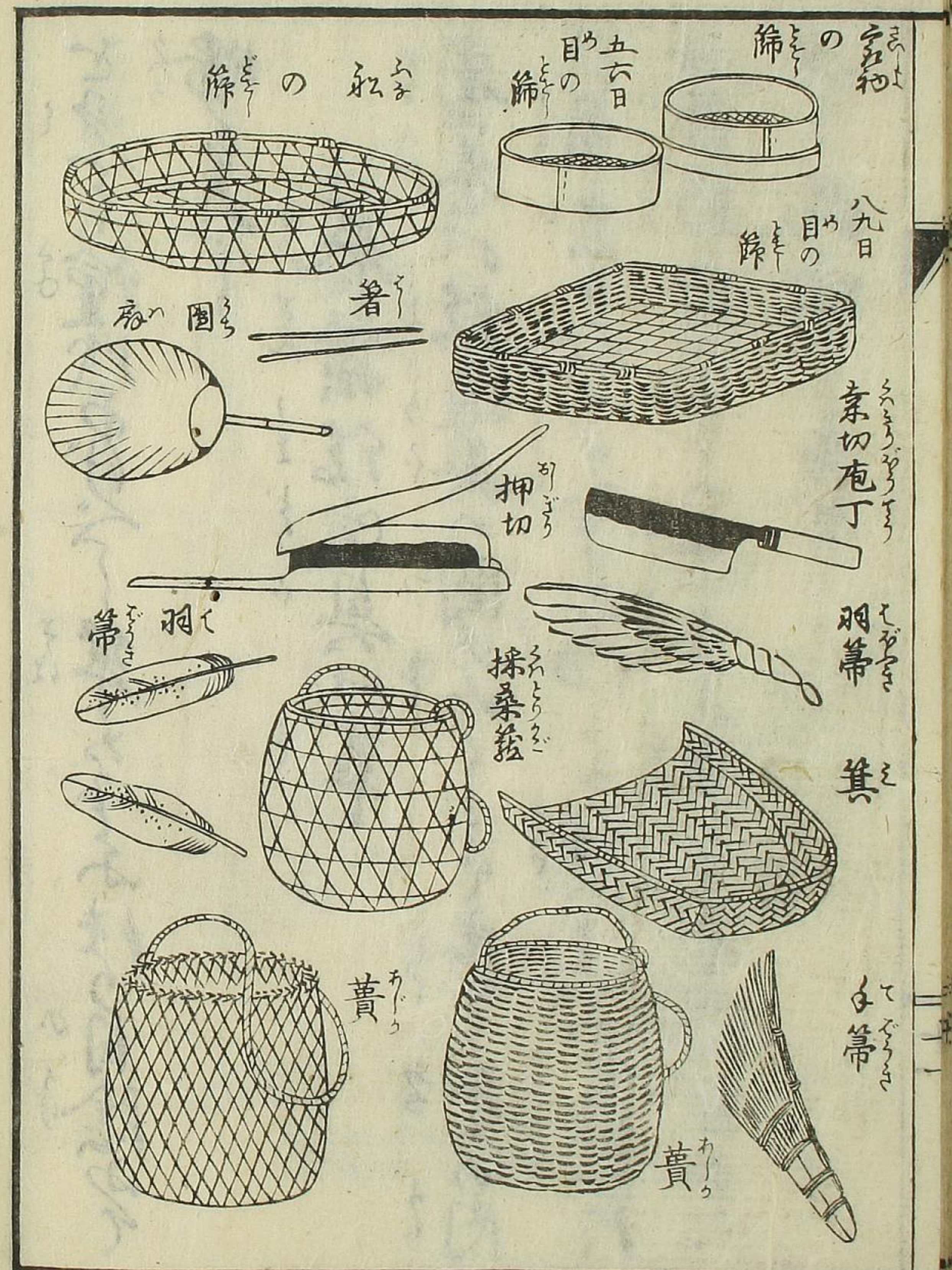
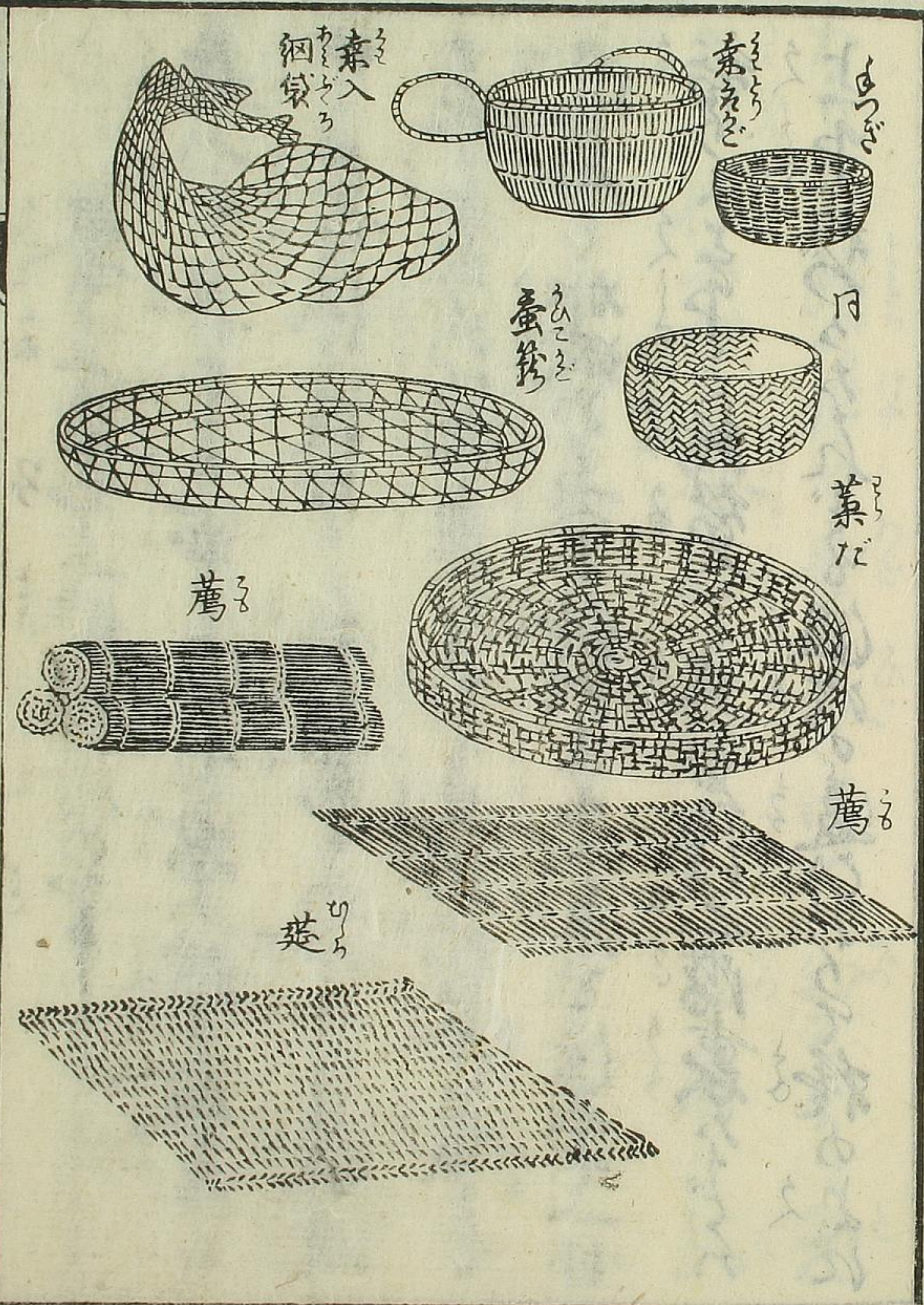


漬みとまのたごい
 漬ふたうのそまつ

と身とく種はあげて
 羊かまふ法の日陰で
 晒すべし

養蚕法道具其事

養蚕の法道具の圖の如くして悉くその内
 に用ふるべし又その他を時々は葉の
 葉を新みいりてを新方を用ふて濕氣を
 かり乾燥し置け



養生と出る時の海の手

春ふゆの其事先中ふると思ふ種と彼客の
中日前後に取出し氣の籠らぬ振りと氣通
るぬる所(均)と是も其土地のを暖く
運来し加減あり種と上下(糸)とはあて一日
替りよと下と均替り其力には二階表など
上下わづらたれども温冷の遠ひわりて種の上に

なるる所(早)く青と蚕は早く出るなり免
角一振ふかり蚕と皮ふなりと出ふやうにか
減とさるる肝要なり何事のそとさるる八十八
夜前後あり養生と出るなりと出るなりと
日の照る處又蚕と或の懐中ふ入るる者有
蒲團ふはるるわりの火の近所と蚕と出た
るは暖く云理ふ出るとさるる事其要

天性^{てんせい}の^{しん}純^{じゆん}な^らしめて^て種^{たね}は^ま皆^{みな}青^{あお}き^はは^らす^る蚕^{かいこ}か^ら
出^でか^らら^ば蚕^{かいこ}は^た九^く府^ふの^あ暖^{あたたか}なる^時に^て固^{かた}合^あせ^種を^{たね}
取^とり^て白^{しろ}紙^{かみ}の^あ枚^{まい}程^{ほど}あ^らは^す是^{こゝ}を^はく^ん或^{ある}は^皮籠^{かご}
又^{また}骨^{ほね}柳^{やなぎ}枝^{えだ}の^あ物^{もの}を^いれ^り火^ひ氣^きの^あ行^ゆ暖^{あたたか}か^らう^る所^{ところ}と^す
お^く木^きは^し時^{とき}の^あ氣^きを^あ編^あむ^こと^思は^れる^る為^{ため}天^{あま}が^おく^は
家^{いえ}内^{うち}を^とと^焼き^やり^て温^{ぬる}ま^して^し薪^{たきぎ}の^あ松^{まつ}葉^はの^あ氣^き
う^らま^り自^{みづか}ら^りる^本焼^きを^うら^まり^て又^{また}出^でか^らら^す煙^{たぎ}

草^{くさ}蚕^{かいこ}ぐ^らう^らは^らな^らば^も思^{おも}は^れる^る蚕^{かいこ}と^も掛^か
糸^{いと}後^{あと}毎^{まい}に^もを^わか^して^は法^{ほつ}淨^{じやう}な^まに^て法^{ほつ}道^{どう}具^ぐの^あ蚕^{かいこ}
出^でか^らら^ば掃^{ほう}除^{じゆ}して^蝶を^とり^て蚕^{かいこ}を^とり^て
最^{さい}初^{しゆ}楮^こを^はて^て蚕^{かいこ}掃^{ほう}除^{じゆ}法^{ほつ}に^て事^{こと}
蚕^{かいこ}の^あ袖^{そで}より^も桑^{かき}の^あ糸^{いと}を^とり^て書^かき^とり^ての^あ極^{ごく}な^らば^も
書^かき^とり^て蚕^{かいこ}出^でか^らら^ば固^{かた}あ^らは^する^る為^{ため}桑^{かき}の^あ芽^め出^でか^ら
る^る年^{とし}の^あ其^{その}時^{とき}に^て掃^{ほう}除^{じゆ}する^る蚕^{かいこ}は^た夜^よ蚕^{かいこ}を^とり^て

雨の元来根といふ葉の葉を種又成と云
 蚕の食との葉のわが花とあるはさ紗かひこ
 掃りとは付をとりわひ被葉の病なく
 よく煙きたる成をとりわひ細く是
 と能篩しまた其のくごみと去り種一夜
 の種も種又合なる用をよまし種を殺の蚕
 中方も知るとる人の種を種を合程用を

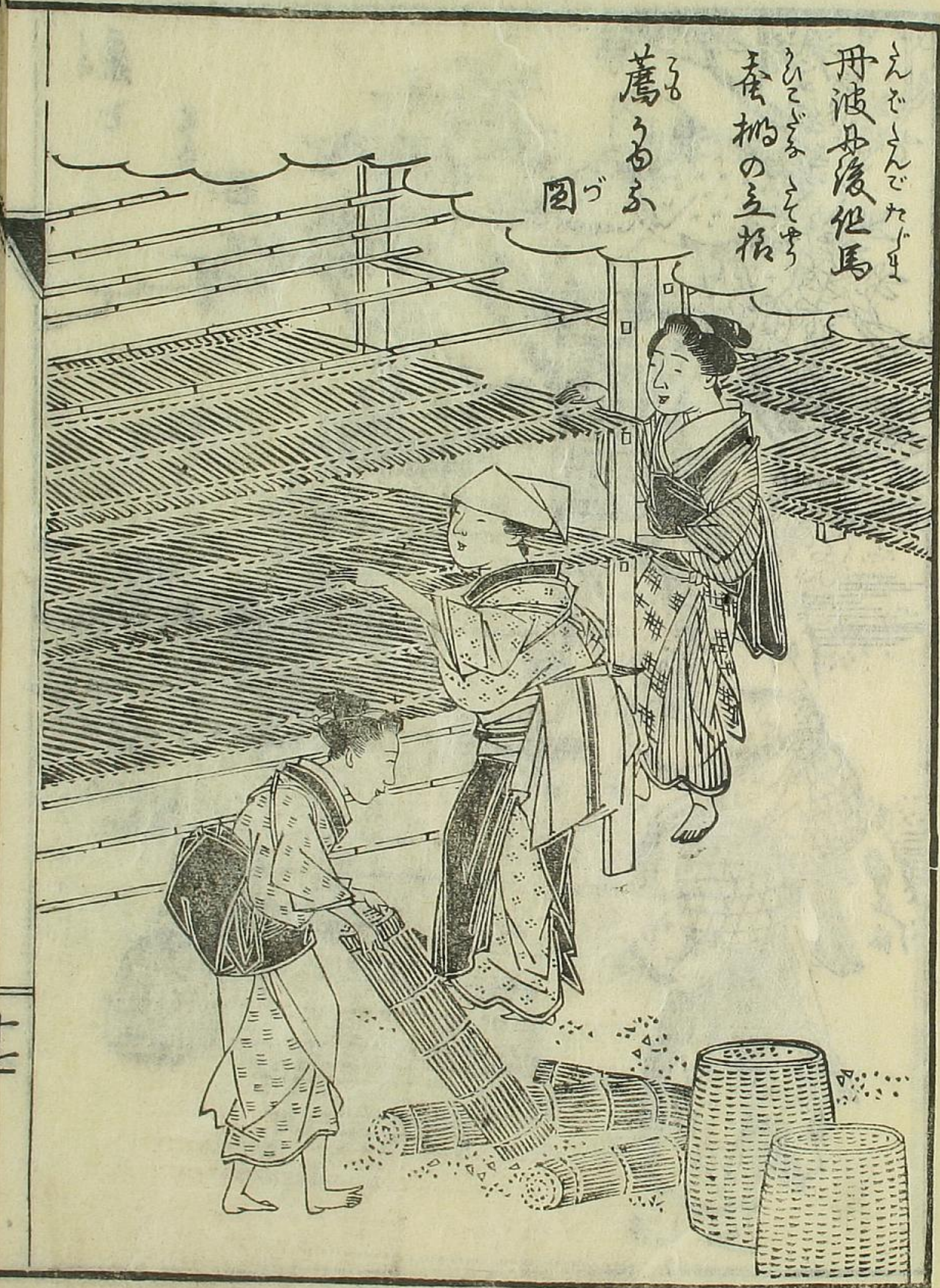


笑れ春巻あり
 見合右様と
 ありて用事せ
 糸糸の藤は
 歩道方因位と用
 今相重九付
 お彼色一巻と



取也何の巻ありて底又早稲のよりなりと能
 程ふん合ありて其上紙と皮彼ううへと能
 又の切巻ありて巻は底ふゆり並其うへ又巻れ
 うふ春巻紙の巻端成取ありて指かそのう
 うり細さ箸とよりとあつらふはとくとたき
 巻の中へ巻とばし或は巻付らんよ巻
 巻と掃振る其日の夕方ふ巻取もを掃く也

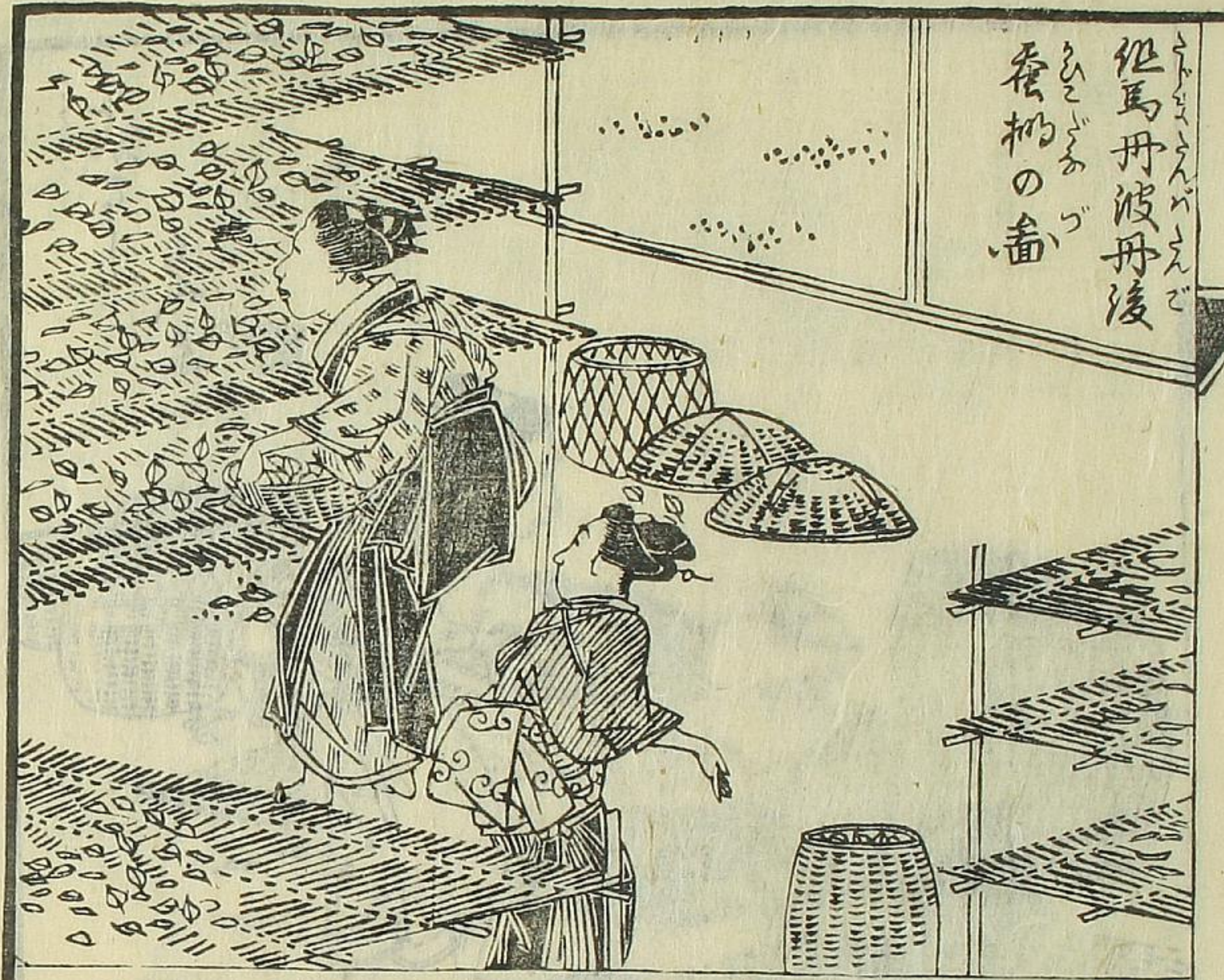
前月ぜんげつ小生せうせいね〜春はる戎えい聖せい日にちの持もちう〜掃はき討うちのその
 春はる何なにれどと練れんとほ〜書かふと〜庭にわの記きより
 夏なつ出いらとり〜至いた角かく春はるの其その日にち切きふ掃はき取とり
 養やしやうへ〜又また春はる戎えい時ときをけけ〜出いか〜至いたの春はるや〜
 痛いたむ〜其その心こころ抱いだめて種ね紙しふ取とつ〜至いたふ春はるも
 随ま分ぶん志しの〜又また時ときを〜袋ふくろ入いれ葉はと〜加か減げん能よく
 ゆり〜多おほ量りやう〜と八はち方ほうへ廣ひろが〜落おち〜と〜し〜葉はの



丹波丹後他馬
 春柳の五振
 薦すすうもふ
 図ず



此馬丹波丹後
養柵の畜



何れも敷多ふ取合
養と養とれ合ぬ様
色をく初月堪ぬ
一日ふ改と皮喰せ葉
の切葉やを一日ふ
み皮喰とく是も
ぬあふり此加減

夫よりや暖なる所へと
所程ふと色冷し
さ月より一色
臈とく葉の養わ
葉は葉切柵
べし余の養成長
りちの柵

しんふ随ふましましより一日ふ或度づ先の烟さ
著るく春下と切度ぐ今春の居うと乾
しかびも来ざるなな仕法より毎日葉と何
きふふ前よ葉とより春の葉と何の葉と何
た人配りも冬と後葉とむらたは極みゆりも喰
すまじある天續く春中とありはるば春の
うふあもいともぬるをせり死むりぐと有り

かききて出ふ葉と喰とく是も春下と燦さ
んがたぬあり春出く日の間を暖の加減別
て大切なり是より七八日の折子入わく是後
趣くは病となふあり又切候のとき山内来れが一
向葉は喰と又春消死とく知れまき又
暖さあり也兼て八方へ風のそら寒候くく人
並に時戸の田安自由中すく雲のかよひ代

たり元くるを蚕る情を依る靈異を尋る
の出と遠の其席を去る居る業我前
小来まの食来らざると彼方歩き
卑く育の虫小わにけ理を考陸分
付業此宛に振替むるに振小長し其中
心け者一に蚕も育ま不又大振放蚕も良
彼業弱ふと付の達者たる蚕弱と蚕の上を登り

業成喰ふ故下母及まの弱を蚕る桑喰ふと
わのたの志のと一と不放りし蚕外行と依
既を依る居ふとある蚕の十分業を喰ひ下ふ
及まの得喰と久たる蚕漸印の付下
たる蚕桑と尋ねども多るよとたる蚕喰を
標と如沙り一糸は皆あやま彼是と内付刻
と弱を蚕の飢ふ及多るは付達者ある蚕

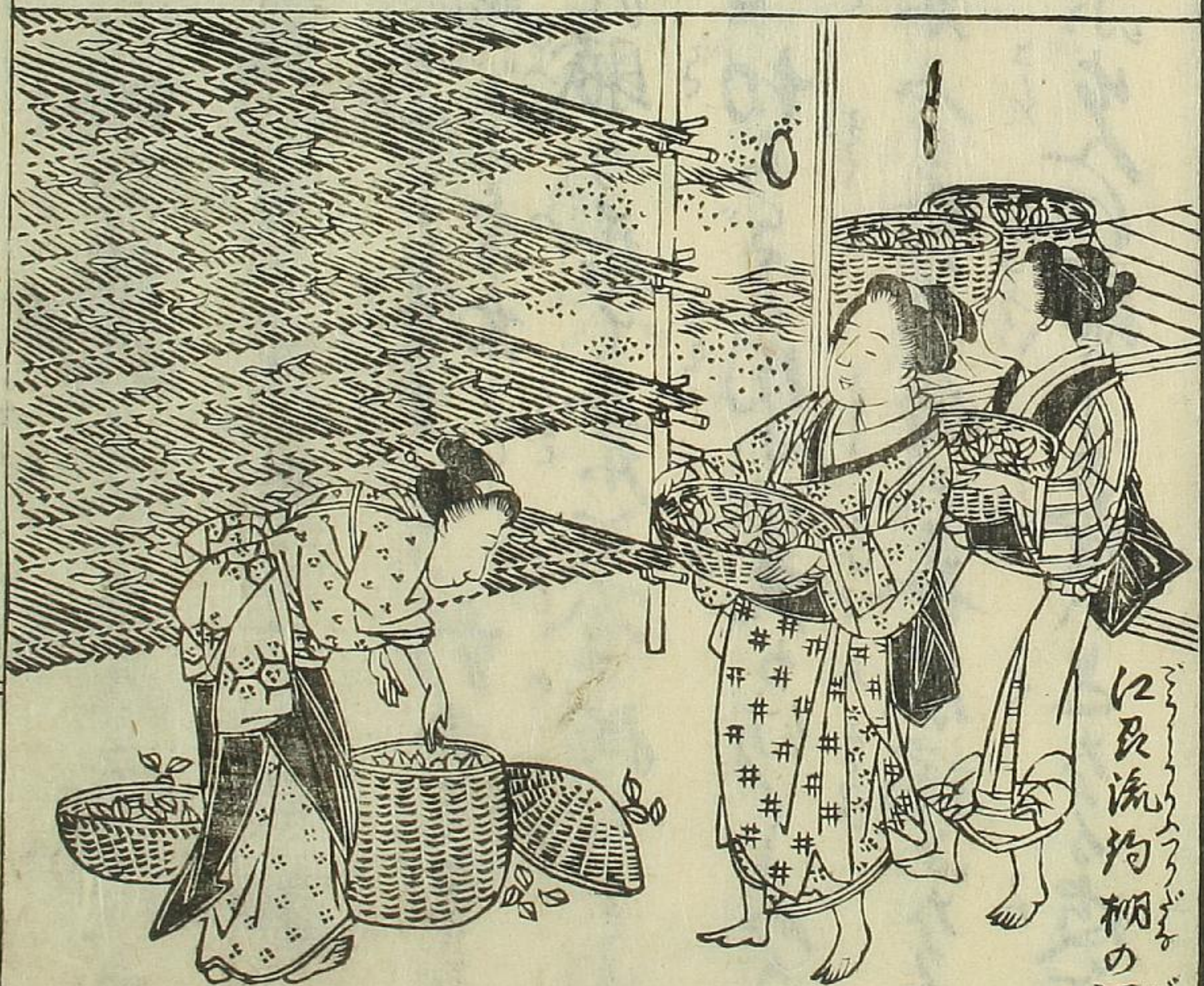
弱き雀二振ふ取わる者若くは一羽ふたり
仕換じわる事か弱き雀もまゝに成あり
鳥取より多かれは是れ此根中より後六々
成なるは然く心付なり

蠶獅子は居起り入道の時

養挿立より七日の頃葉を喰止む色白
く頭ぬくと成る是と獅子は居体とよひとき

早く居敷を取替てうねり羽の付る居敷
五層人と思ひて若くは夜葉喰とよひとき
くま端れよりぬくの細なる雀のうねり居敷
は虫の葉の切粉とあり掛り付る雀は
上成葉に遠よりたりて夜葉を喰せし居此
如く居敷を替へては付る縁通ふ居る
雀の中より今まで中通ふと今度

縁糸並又今もぞ
 柳のとふ糸一の糸
 糸一とたまあや
 糸下柳又有らん
 と柳ふとけ糸七
 是は柳のと下糸
 陽氣か減遠ふ故
 たるり糸七如く糸七



に長流約柳の図

蚕糸子のとれ
 糸七
 糸七

うらな図

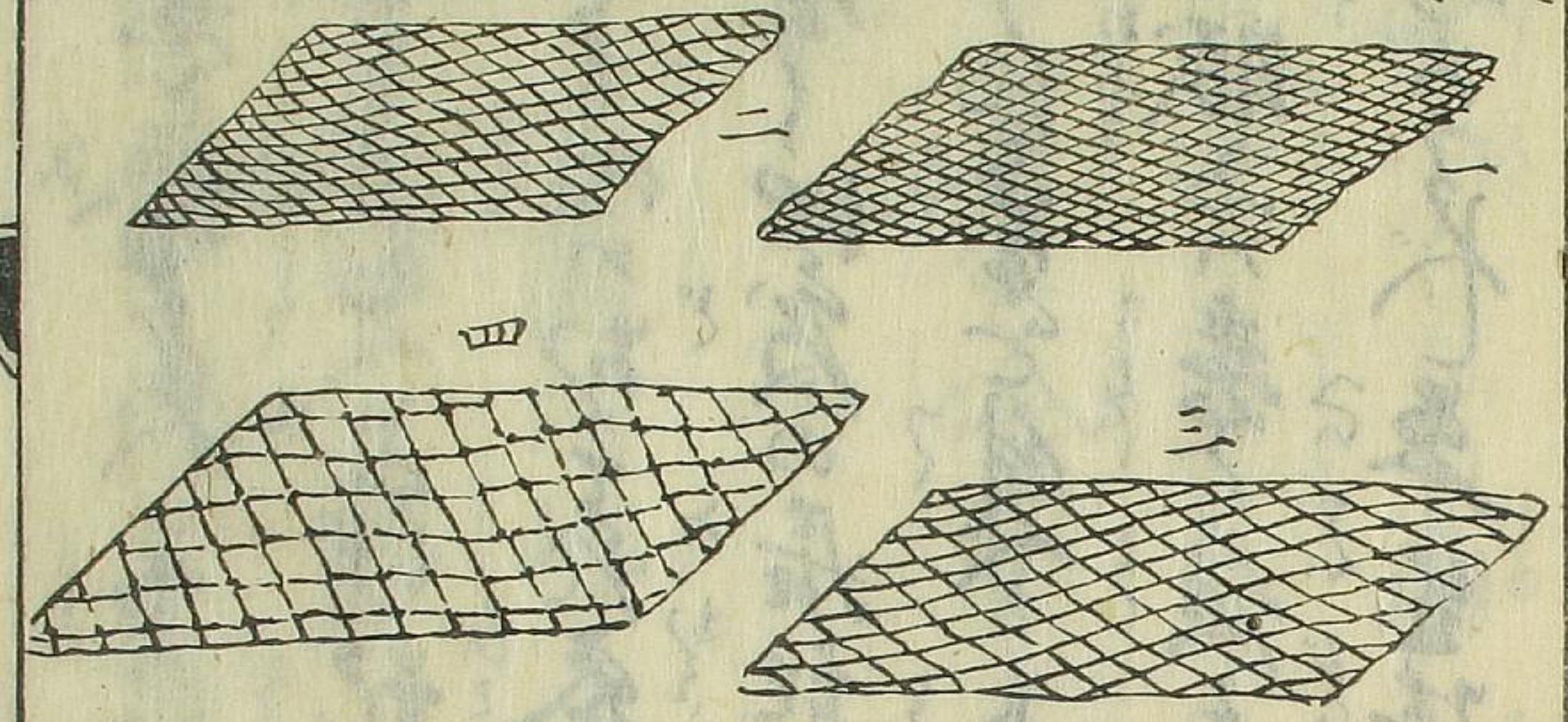


ころり人となれが蚕一調ふ能揚ふたう相蚕椰子
 此体と身入の業は一日ふ六夜ありかゆ歳
 くわふべし
是は東ふりての責業と云ふ
中国にあり業と云ふ
 糸付蚕業此下に眠り居て業と冷砂ととも
 是と構と業と冷切らざる肉ふの責りけくあり
 搦くべし責業を食たる付の蚕不搦ふたう
 ぞく糸も肉ふ先に眠り蚕いとたる皮と

脱出ふ 是は衣と ぞん衣と眠ぎ業のうへふ起り
 上るひ起り〜蚕入の虫ふ業とあり止る〜
ふりてのる〜のむ ふりてのる このせあ
 糸付大方は〜蚕と〜ひ責業とぬ搦
 ば先又起りし蚕業冷食ふらむせよ蚕
ア〜のむ ア〜のむ ア〜のむ
 の漸長眠ふたうふとゆ業業と止るゆ先ん
 起りし蚕或は皮の責業と冷食ひ肝心の冷
 盛の〜らあ〜蚕のあめ食止あふ多ふゆ大

きに痛むて一度の起癒皆あめ止め業れ
 り遠より蚕小大小業色これ病ひ出る玉
 て大切の事ありけ時ある固めての蚕網と云
 物とはよくは細の教習程用言しく蚕の大
 こふ見合後程固りきこと用ひ細のきの方
 の蚕は半眠る頃蚕の上に細紙を業こ業の
 業る細の目と波ぬ程不接あも乃とふゆりか

蚕の網の図



糸をへりおれごときば
 眠る蚕はわよとくと居る
 眠るる若くは蚕の網の目と
 澄りとなる糸またり業
 成陰たうけ付細の目方と
 糸とふゆりし若くは蚕紙
 糸の若くは若くは

桑と喰も長し巾に涉りし眠蚕をさし暖あり
あつたあし上げ起りよふ招ふまてし影のこ
もる付のあそびを春も子も舞も一調ふ能指ふ
なぐほ夜の居記在ふ何じ先角一指ふ指ふ
うに筆を付べし右の烟さの門と掛る付る
の眠ふ巻く結そらひを扱ひふり着入らふ歩
州を長し平生は分たる糸もまてし糸のこまに
なれ

へ出小くしと繭の少れを何れも長し海も小糸は
糸細く糸はよやくしと縁目やあつた分は
ふふ糸と食せし蚕のこも大なりあしと糸は
なすおあし

繭は作らぬ仕格も
扱蚕はらぬ盤も糸のこも透り糸は扱ふ
なり繭と化らんと桑隱らふとなげね歩むと死

玉くさるる能く仕
 振色くつりしりども
 丹波丹後俣馬の茶
 藪の枝と柳に間ふな
 うぐ並に間ふ茶を入
 おの道候ふまの能く
 又薪ふ茶電りなまを



丹波丹後
 俣馬藪と
 茶の園

卯へそりかゝ暖なる所へ上げまへ並はゆと
 つくしとありまより二百めふ身わあると藪
 成しつひ風を入藪の湿りと乾とあり又江別
 二階裏より縄と二筋づはうけ縄ふあな
 竹の管成通し香の柳を釣りわけ並茶を
 とれた柳の薦と柳本とらに上げ下り自中
 とふたうり又まの能くつひ柳ふ着いし

又厚くとれど軽き
 蚕の尿りすもふが里
 糸はふろくたる道せん
 蔦入をど扱すありぬ
 六日お染らどまが一夜
 蔦不入は風ふあしべし
 八日おば日あけ午つひ



丹波丹後但馬
 蔦やまの園



江別流
 葉芭ふ
 蚕を入
 地を

葉芭ふ蚕と金鳥
 と栢の園へまが
 繭とはくくまへ又
 まがはく蚕の葉成
 食する物故痛し
 陸分り早ふあり
 久の繭作新へ入也

中此繭成りしあ出ざる程ふとどく又あ天なれば
 早く炭火をさかしく焙爐ふりれ中の繭さし
 め出さる程ふとどく

線取極く事

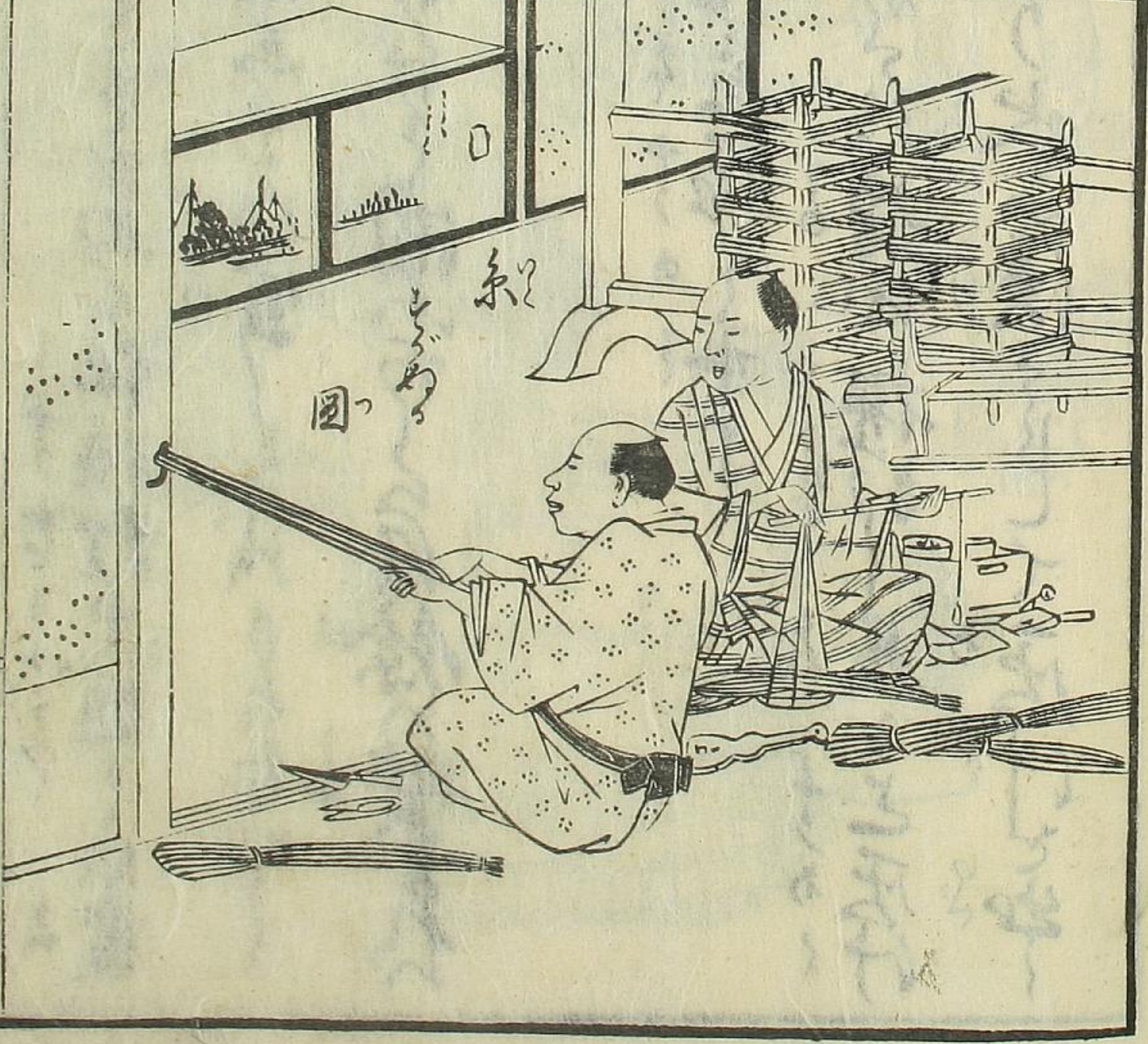
蚕をてに繭とぬぬ日同より糸成るまで
 固く糸を流練まるといども先江戸列島線
 取女の左の方へ電成る人鍋の湯煮たてふと丸

てもま糸とほ又後線
 鍋へいさ加減と煮たる
 と丸箸成りしとくまは
 せ糸はとあどぐくそり
 ちめん身傍ふ糸成る
 程めち獲ふ糸付る丸
 わくへ圓のおとく右の糸

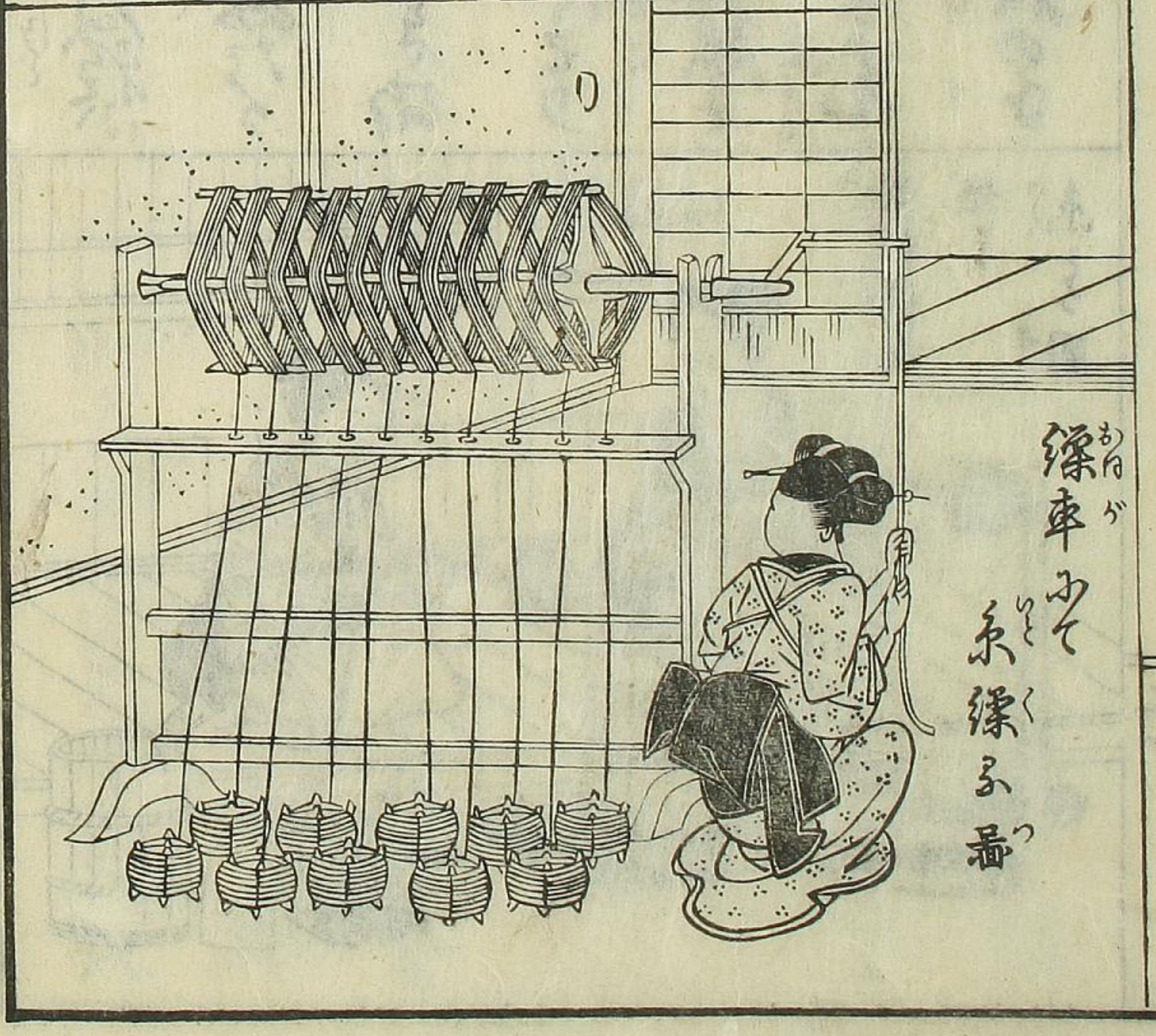


丹波丹後
 糸とる圓

加減くげんあるべし
いそとろくしそしうろくがわ
 線取仕法流儀多
まら
 一匹一匹とのもちゆ
せいの
 べし又糸押あがる
おのろ
 深車おのろこれに煙けむりあふ
さうべい
 ようて色く仕法あ
せうろくやう
 正との入とも先一方



ひとと糸は細く
おびで
 かる皮毎おろし
とうそん
 取添とむらたれ
あう
 根ふ毛付るかる又
おぬ
 中白條のほをたれ
いそとろく
 を糸にゆるく又煮
せいの
 され糸は出は是ふ



深車おのろあて
 糸いと繰くふ番ばん



女房と
 千立る
 園

と園づふわ形かと又また糸いとととままわわるる仕し振は程ぢ又また園の後ご
 りりわわままづづまま新あらふふままづづひひ写うつししもも成なりちちももへへ
 依よるる今いま一ひと方かたととわわげげとと園の何なにももにに餘よりり繁しげななれれ
 度たびふふままゆゆくくと

美み綿わた仕し立た極ごく事こと

美み綿わたのの線せんにに取とりりががららにに蒲か汰た搦なりり是ことと灰はい汁じゆ
 りりとと能よくく洗せんままららうう水みづみみ漬ぢききししてて灰はい汁じゆとと出ですす

早稲田大学図書館

011488479638